

Economic Indicators

発表日:2019年5月24日(金)

消費者物価指数(全国・2019年4月)

～10連休要因でコアコアが上振れ。6月以降は鈍化の公算大～

第一生命経済研究所 調査研究本部 経済調査部

主席エコノミスト 新家 義貴 (TEL:03-5221-4528)

(単位:%)

		全国					東京都区部				
		総合	生鮮除く総合	食料(酒類除く)及びエネルギー除く総合	生鮮食品及びエネルギーを除く総合	石油製品	総合	生鮮除く総合	食料(酒類除く)及びエネルギー除く総合	生鮮食品及びエネルギーを除く総合	石油製品
		前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比
18	1月	1.4	0.9	0.1	0.4	7.3	1.3	0.7	0.3	0.4	8.8
	2月	1.5	1.0	0.3	0.5	9.2	1.4	0.9	0.4	0.5	10.7
	3月	1.1	0.9	0.3	0.5	7.0	1.0	0.8	0.4	0.5	7.6
	4月	0.6	0.7	0.1	0.4	7.0	0.5	0.6	0.3	0.3	7.2
	5月	0.7	0.7	0.1	0.3	9.1	0.4	0.5	0.1	0.2	11.0
	6月	0.7	0.8	0.0	0.2	13.6	0.6	0.7	0.3	0.4	15.7
	7月	0.9	0.8	0.0	0.3	14.3	0.9	0.8	0.4	0.5	15.7
	8月	1.3	0.9	0.2	0.4	13.9	1.2	0.9	0.5	0.6	15.4
	9月	1.2	1.0	0.1	0.4	14.8	1.2	1.0	0.5	0.7	16.3
	10月	1.4	1.0	0.2	0.4	15.5	1.5	1.0	0.5	0.6	17.2
	11月	0.8	0.9	0.1	0.3	11.9	0.8	1.0	0.5	0.6	11.8
	12月	0.3	0.7	0.1	0.3	5.5	0.4	0.9	0.4	0.6	4.4
19	1月	0.2	0.8	0.3	0.4	1.7	0.5	1.1	0.7	0.7	▲ 0.1
	2月	0.2	0.7	0.3	0.4	▲ 0.3	0.6	1.1	0.7	0.7	▲ 0.2
	3月	0.5	0.8	0.3	0.4	1.6	0.9	1.1	0.6	0.7	1.5
	4月	0.9	0.9	0.5	0.6	2.3	1.4	1.3	0.9	0.9	2.0

(出所)総務省統計局「消費者物価指数」

○コアコアが伸び率を拡大

総務省から発表された19年4月の全国消費者物価指数(生鮮食品除く)は前年比+0.9%と前月から上昇率が0.1%Pt拡大した。エネルギー価格は前月から伸びがやや鈍化したが、除く生鮮食品・エネルギー(日銀版コアコア)が前年比+0.6%(3月:+0.4%)、食料及びエネルギー除く総合(米国型コア)が前年比+0.5%(3月:+0.3%)と、コアコア部分がそれぞれ前月から0.2%Pt伸び率が拡大したことで、CPIコア全体でも前月から改善している。コアコアについては、10連休を前にして宿泊料と外国パック旅行が大きく値上がりしたことが押し上げ要因になっている。

○10連休による宿泊料、パック旅行の値上がりが押し上げ要因に

エネルギー価格は前年比+4.6%と、前月の+5.1%から伸びがやや縮小した(前年比寄与度:3月+0.41%Pt→4月+0.37%Pt)。原油価格の上昇を受けてガソリン価格が値上がりし、前年比でもプラス寄与が拡大した一方、電気代、ガス代の伸びが鈍化したことが押し下げ要因になった。

一方、エネルギー以外の部分をみると、除く生鮮食品・エネルギー(日銀版コアコア)は前年比+0.6%、食料及びエネルギー除く総合(米国型コア)は+0.5%と、ともに前月から0.2%Pt上昇率が拡大している。季節調整値でも、ともに前月比+0.1%である。前年比の内訳では、宿泊料と外国パック旅行による押し上げが大きく、この2品目だけで、前月と比べてCPIコアへのプラス寄与が



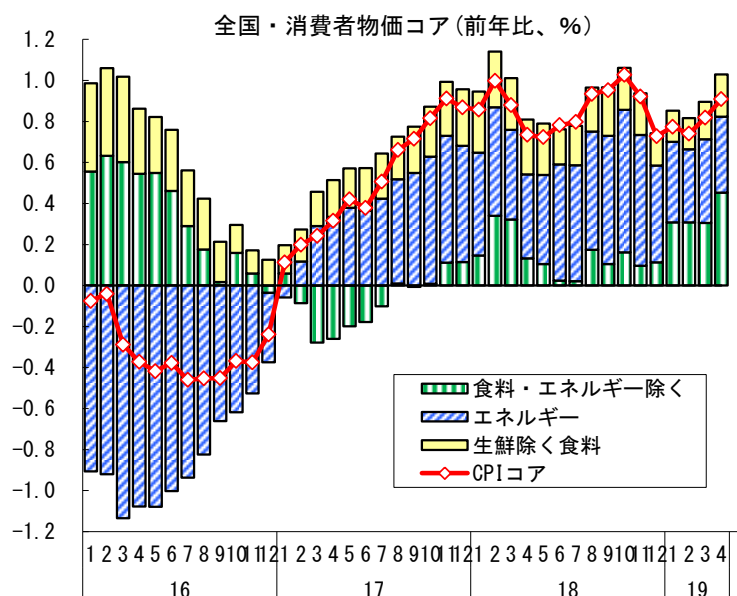
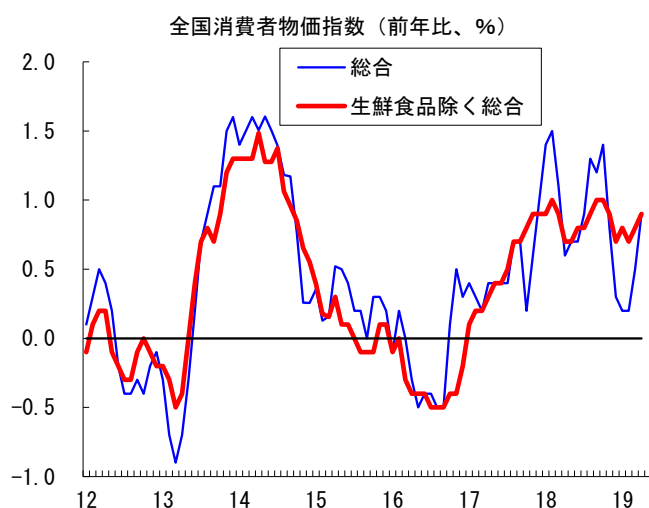
0.08%Pt 拡大している。今年のGWが10連休になったことの影響が大きいとみられる。

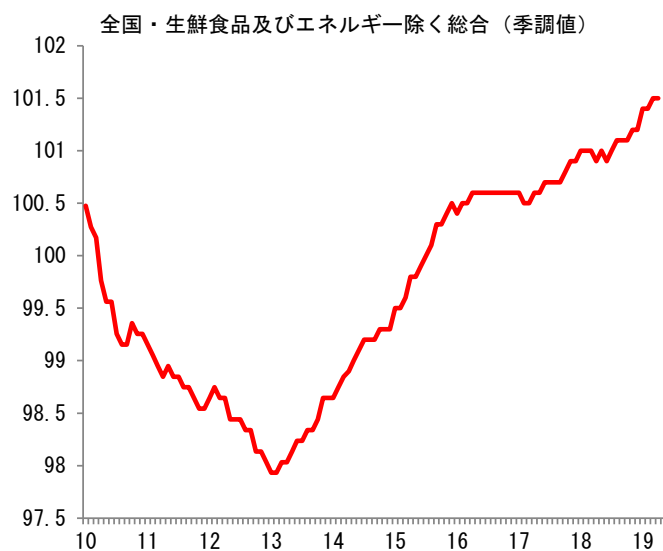
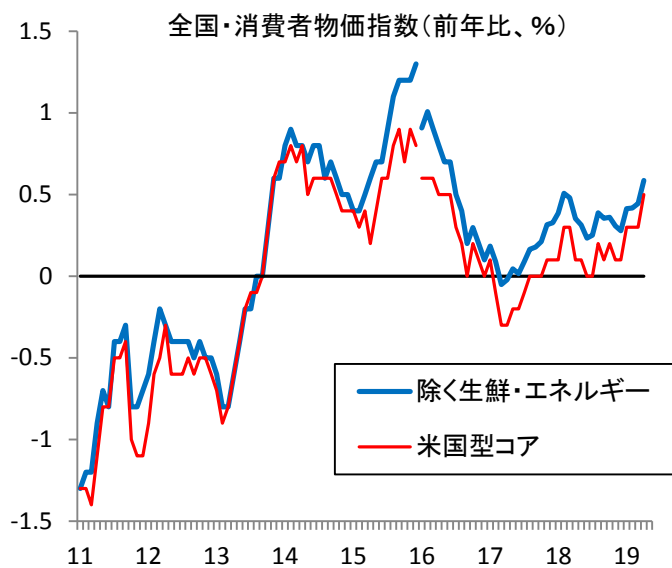
今月の日銀版コアコア、米国型コアは伸びが拡大したが、こうした10連休による旅行需要の拡大という一時的な要因が大きいと思われる。5月についてもこの2品目は高い伸びになる可能性があるが、6月以降は価格は落ち着く可能性が高く、この要因による押し上げ分は剥落することが予想される。コアコアの伸びが拡大基調にあると見る必要はないだろう。先行きについても、強気になることは難しい。個人消費に力強さが欠けることから、値上げに対する企業の慎重姿勢が強い状況には変化はないとみられることに加え、足元で景気が踊り場状態に陥り、先行き不透明感が強いことも懸念材料だ。今後もコアコアは基調としては緩やかな伸びにとどまる可能性が高いとみるのが自然だろう。

○先行きは鈍化傾向で推移する可能性大

先行き、CPIコアは緩やかな鈍化傾向で推移するとみている。5月については前述のとおり10連休要因による押し上げが続くことから前年比で+0.9%～+1.0%の比較的高い伸びになるとみられるが、6月以降は上昇率が低下していくだろう。

鈍化の主因はエネルギー価格である。エネルギー価格のうち、電気代・ガス代は制度上、燃料価格の変動がかなり遅れて反映される。昨年末にかけて原油価格が大幅に下落したことの影響が遅れて顕在化することに加え、昨年の伸びが高かった裏が出ることもあり、電気・ガス代は前年比でプラス寄与が明確に縮小していく見込みだ。結果として、エネルギー価格の上昇率は19年末にかけて鈍化していく可能性が高い。こうしたエネルギー価格のプラス寄与縮小を補えるだけの強さはコアコアにはない。エネルギー価格の鈍化に伴って、CPIコア全体でも上昇率は鈍化するだろう。





(出所) 総務省統計局「消費者物価指数」

(注) 消費税率引き上げの影響は除いている

本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所調査研究本部経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見通しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命保険ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。

